

ジェンダー平等と学校教育制度をめぐる課題探索的検討

——男女別学校出身者の語りの分析から——

一橋大学大学院 徳安慧一

1. 目的

本報告の目的は、ジェンダー平等と学校制度との関係について、男女別学校出身者によるライフコースについての語りから課題を探索する形で検討することである。これまで、学校制度、特に男女別学制の学校での経験が、諸個人のジェンダー意識や性役割観に影響を与えることが指摘されてきた。しかし、その後の人生において、こうした学校での経験が当該個人にどのように関わってくるのかは必ずしも明らかではない。ジェンダー意識や性役割観が可変的であるとすれば、特定の時点の経験や状況がそれ以降どのように諸個人に影響を与えるかについて、その課題を明確化する必要がある。そこで本報告では、別学校出身者が学校での経験をどのように捉え、それが現在までの人生にどう関わっていると捉えているかを検討することで、ジェンダー平等と学校制度に関わる課題を探索する。

2. 方法

上記の目的から、本報告では別学校出身者による自身の語りをデータとして取り上げる。半構造化インタビューに基づく遡及的な語りは、調査対象者による現時点から過去の経験への内的に一貫した解釈であり、対象者の学校経験を人生の長期的なスパンのうちに位置づけることが可能となる。また、当該の語りはジェンダー平等や別学校の共学化をめぐる現在の状況を踏まえてなされるため、これらのテーマに関わる事柄に語りの関心が向けられうる。これらのことから、対象者の語りで特に関心が向けられた点を分析することは、本報告の目的である課題探索において有用である。

3. 結果

分析の結果、対象者の語りからは大きく次の 2 つの課題が見出された。一つ目は、男女別学校での経験およびそれがもたらしたと見なされる影響と、卒業後に起こりうるジェンダーに関わる出来事との関連についてである。例えば、就業や結婚、育児などの経験がジェンダー意識や性別役割観との関わりで捉えられる時、その形成に影響するとされる別学校での経験はどう意味付けられるのか。二つ目は、男子校と女子校のような性別、更には在卒年次の異同と別学校での経験やその影響との関連についてであり、諸個人にとっての歴史的・社会的文脈の中での男女別学制の位置づけという課題が見出される。

4. 結論

以上で析出された課題を検討していくにあたり、次の 2 つの方法を提起することとしたい。まず、男女別学制というジェンダーに関わる学校制度を当該の教育段階よりも長い個人のライフコースの上に位置づけることで、各ライフステージ間の連続的/非連続的な関係をふまえた観点という方法的意義を持ちつつ、ジェンダー平等と学校制度の問題についての検討が可能となる。また、性別・世代間比較を行うことによって、各世代が置かれた歴史的・社会的な状況と個々人が至ったライフステージや経験したライフイベントとの関係の検討を通じ、個別の別学校での経験を教育行政や「ジェンダーと教育」、人材輩出などの問題を体現した男女別学制という水準を捉える契機となり得る。